



物流ニッポン

2008年(平成20年)

9 | 8 (月)

発行/月曜日・木曜日 第3162号

購読料/半年32,130円(月額5,355円、税込)

©物流ニッポン新聞社 2008 (昭和44年4月1日第三種郵便物認可)

45フィートコンテナ走行実験

川崎港「物流拠点」検討

関東局 WG再編、施策進める

【石井麻里】関東地方ターミナル(CT)背後整備局は三日、「京浜港に大規模物流施設が立地物流高度化推進協議会」し、四十五フィートコンテナ車

(中田信哉委員長、神奈川大学教授)を開き、今年度の行動計画を策定し、臨海部での海上コンテナ輸送の効率化と輸送能力向上に向け、マルチシャシーによる四十五フィートコンテナ走行実験を行う。構想では、コンテナ

【石井麻里】関東地方ターミナル(CT)背後整備局は三日、「京浜港に大規模物流施設が立地物流高度化推進協議会」し、四十五フィートコンテナ車(中田信哉委員長、神奈川大学教授)を開き、今年度の行動計画を策定し、臨海部での海上コンテナ輸送の効率化と輸送能力向上に向け、マルチシャシーによる四十五フィートコンテナ走行実験を行う。構想では、コンテナ

今年度は、従来の陸上

ワーキンググループ(WG)、海上WG、鉄道WGを、より現実に近い議論を進めるため、「背後圏内陸部輸送WG」「臨海部輸送WG」「はしけ・内航フィーダー輸送WG」に再編。

臨海部輸送WGでは、臨海部での効率的な海上コンテナ輸送形態の構築を目指す。四十五フィートコンテナへの国内対応を視野に、マルチシャシーを使って、四十五フィートコンテナの走行実験を行う。

背後圏内陸部輸送WGでは、外貨貨物鉄道輸送を活性化させる。海上コンテナを扱えない最寄り駅の利用を拡大し、JRコンテナでのマッチングによる効率輸送を進めるため、「十二フィートコンテナのラック輸送」を検討。

横浜港本牧ふ頭駅での積替え施設活用や内陸部貨物駅のインランドデポ機能の効果も調べる。

はしけ・内航フィーダーWGでは、東京湾(東京港、川崎港、横浜港、千葉港、市原港)で効率的な輸送体制を構築する。はしけの荷役作業が本船優先になっていることから、東京港、横浜港、川崎港の既存CTでの効率的な荷役・輸送体制と

ともに、コンテナを扱っていない岸壁(千葉港)での荷役可能性も探る。